

縁起支解釈の展開

—上座部大寺派の三世両重因果説—

馬場 紀寿

近代以降多くの成果を挙げてきた仏教学の中でも、縁起に関する研究はひとときわ層の厚い蓄積がある。木村泰賢[1922]、赤沼智善[1925]、宇井伯寿[1926]、和辻哲郎[1927]、舟橋一哉[1952]、村上真完[1965]、中村元[1971]、三枝充恵[1978]、梶山雄一[1984]、Aramaki, N.[1985]、平川彰[1988]、Bucknell, R.S.[1999]等により、比較的数の少ない縁起説から十二支縁起説へ展開していく過程が明らかにされ、木村泰賢[1937]、森章司[1995]、村上真完[2000]、Schmithausen, L.[2001]によって諸部派の縁起説が幅広く整理・分析された。

上座部大寺派¹の縁起説についても、松田慎也[1980]、浪花宣明[1991a][1991b]、片山一良[1992]が縁起 (Paṭiccasammuppāda) の語義解釈を明らかにし、林寺正俊[1998]、浪花宣明[2000]が *Visuddhimagga* の縁起説を分析している。

しかし、従来の研究では、アビダンマに特有な縁起支解釈が個別に論じられたり、*Visuddhimagga* の縁起説が分析されることはあっても、〈経典→アビダンマ→註釈文献〉という文献の先後関係を踏まえて「縁起支解釈の変遷」が総体的に明かされたことはなかったと思われる²。上座部大寺派で十二縁起支を定義・解釈する文献は、

Vibhaṅgasutta (=Vibh-s) → *Vibhaṅga* (=Vibh) → *Visuddhimagga* (=Vism) → 律・ニカーヤ註

という順序で成立し、その縁起支定義は時代を追って変わっているが、どの段階でどのような変化が起こり、各段階の変化が何を意味するのかについては未だその全体像が解明されていない。本稿では、これら十二縁起支を定義する上座部大寺派文献を時間軸に沿って検討し、「縁起支解釈の展開」を考察したいと思う。

I. Vibhaṅgasutta から *Vibhaṅga* へ1-1. *Vibhaṅga* における「諸行」「名」「有」定義の改変

Samyuttanikāya Nidānavagga 2 Vibhaṅgasutta (=Vibh-s) は、仏が諸比丘に十二支縁起 (流転分順観) を示し、その後で各縁起支を解説する経典である。また、アビダンマである *Vibhaṅga* (=Vibh) も、縁相分別 (Paccayākāravibhaṅga) という一章の経分別³ (Suttantabhājanīya) において、冒頭に十二支縁起 (流転分順観) を示した後、各縁起支を定義している。

Vibh の成立は Vibh-s より遅いこと、Vibh の経分別が四諦や蘊・処・界などの基本教義については経典を踏まえて解説をしていること、十二支縁起を説示した上で十二縁起支を定義する経典は Vibh-s 以外に存在しないこと⁴、両方で説かれる縁起支の定義のほとんど (無明・識・[名色の] 色・六処・触・受・愛・取・生・老死) が一致すること、これら

の理由から、Vibh が Vibh-s の縁起説を継承していることが分かる⁵。

ところが、【表 1】に示したように、両者の縁起支定義は大部分が一致する一方で、一部（諸行・〔名色の〕名・有）が異なっている。矢印の右の太字に注目してほしい。

【表 1】

Vibh-s		Vibh
無明：四諦に対する無知 ⁶		同左 ⁷
諸行：身・語・心行 ⁸	→	福・非福・不動・身・語・心行
識：眼・耳・鼻・舌・身・意識 ⁹		同左 ¹⁰
名：受・想・思・触・作意 ¹¹	→	受蘊・想蘊・行蘊
色：四大・四大所造色 ¹²		同左 ¹³
六処：眼・耳・鼻・舌・身・意処 ¹⁴		同左 ¹⁵
触：眼・耳・鼻・舌・身・意触 ¹⁶		同左 ¹⁷
受：眼・耳・鼻・舌・身・意所生受 ¹⁸		同左 ¹⁹
渴愛：色・声・香・味・触・法愛 ²⁰		同左 ²¹
取：欲・見・戒禁・我語取 ²²		同左 ²³
有：欲・色・無色有 ²⁴	→	業有・生起有
生：各々の衆生の、各々の衆生の類における生・誕生・入胎・発生・諸蘊の出現・諸処の獲得 ²⁶		同左 ²⁵
老：各々の衆生の、各々の衆生の類における老・老衰・歯の欠落・白髪の生え・皺の寄り・寿命の減少・諸根の老熟 ²⁸		同左 ²⁷
死：各々の衆生の、各々の衆生の類からの死去・死没・破壊・没滅・死亡・命終・諸蘊の破壊・身体の放棄 ³⁰		同左 ²⁹

Vibh-s とは異なる縁起支（「諸行」「名」「有」）の定義は次のようなものである。

【諸行の定義】 「無明を条件として〔生じる〕諸行」とは何か。福行，非福行，不動行，身行，語行，心行である³¹。

【名の定義】 「名」とは何か。受蘊，想蘊，行蘊である。これが名と呼ばれる³²。

【有の定義】 「取を条件として〔生じる〕有」とは何か。二種の有がある。業有があり，生起有がある。この内，業有とは何か。福行，非福行，不動行である。これが業有と呼ばれる。全ての有に導く業も業有である。この内，生起有とは何か。欲有，色有，無色有，想有，無想有，非想非非想有，一蘊有，四蘊有，五蘊有である。これが生起有と呼ばれる³³。

既に述べたように、Vibh の縁起説が Vibh-s を踏まえていることは間違いないから、Vibh-s と異なる縁起支定義は Vibh が定義を改変したものである。

1-2. Vibhaṅga で生じた「諸行⇒識⇒名色」と「有⇒生」の対応性

Vibh の改変作業は、次のようにまとめられる³⁴。

- ① 経典における「諸行」の定義である「福行・非福行・不動行」(SN Nidānavagga51 Parivimamsanasutta) と「身行・語行・心行」(Vibh-s) という二種の定義を組み合わせて六行とした。
- ② 経典における「名」の定義である「受・想・思・触・作意」を、経典には見出せない「受・想・行蘊」という定義に転換した³⁵。
- ③ 有を「業有・生起有」と定義した。その内、業有に「福行・非福行・不動行」を収め、生起有に、経典における「有」の定義である「欲有・色有・無色有」を含めた³⁶。

Vibh は「生」を「諸蘊の出現 (khandhānaṃ pātubhāvo)」と見なしているから、①-③の三項目の変化によって、<行⇒識⇒名色>と<有⇒生>に【図1】のような対応関係が生じているのである。

【図1】

諸行⇒識⇒名色 =	福行・非福行・不動行	⇒	五蘊 (識・名色)
	身行・語行・心行		
有 ⇒ 生	=	業有 (福行・非福行・不動行)	⇒ 諸蘊の出現 (生)
		生起有	

「業有」は文字通り「業」であり、「福・非福・不動行」もその「業有」に含まれているから、両者は「業」という点で対応している。また、「識」「名色」は「五蘊」を指し、「生」は「諸蘊の生起」だから、両者は「五(諸)蘊」という点で対応している。以上のような対応関係は、Vibh-s に見出すことはできない。Vibh は、「諸行」「名」「有」定義を改変することで、十二支縁起中の二箇所に「業⇒五(諸)蘊」という対応関係を生み出したのである³⁷。ただし、「身・語・心行」と「生起有」の位置付けが明確ではない点は銘記しておく必要がある。

II. Vibhaṅga から Visuddhimagga へ

2-1. Vibhaṅga と Visuddhimagga の一致

上座部大寺派の教義を体系化した Visuddhimagga (= Vism) は、慧地品 (Paññābhūminiddeśa) で縁起説を詳論している。Vibh-s と Vibh の定義が同一である縁起支 (「識」「六処」「触」「受」「愛」「取」) については、基本的にその伝統的な見解を踏襲している³⁸。そこで、問題となるのは、Vibh-s と Vibh で異なる定義をしている箇所 (「諸行」「名」「有」) である。Vism がどちらの縁起支定義を採用するかで、Vism の縁起説の特質が分かるだろう。Vism は「諸行」「名」「有」を次のように定義する。

【諸行の定義】 福・非福・不動行の三と身・語・心行の三というこれらの六が、「無明を条件として〔生じる〕諸行」である³⁹。

【名の定義】 「名」とは、対象に対して向かうものであるから、受などの三蘊であ

る⁴⁰.

【有の定義】 存在するから、「有」である。それ（有）は業有と生起有の二種ある。

「二種の有がある。業有があり、生起有がある」と説かれる通りである⁴¹。

Vism は、Vibh の「諸行」「名」「有」定義を採用しており、殊に「有」の定義に関しては Vibh を直接引用している（鍵括弧内）。Vibh における「諸行」「名」「有」定義の改変が Vism の縁起支定義に決定的な役割を果たしていることが分かる。

2-2. Visuddhimagga における「身・語・心行」と「生起有」の位置付け

Vibh では「身・語・心行」と「生起有」の位置付けが明らかではなかったのに対し、Vism は「身・語・心行」と「生起有」について、次のような解釈を加える。

身体に関わる意思が身行である。言葉に関わる意思が語行である。意に関わる意思が心行である。この三〔行〕は業を遂行する瞬間に福行等の門から生起することを示すために説かれたのである⁴²。

以上の三（身・語・心行）は前の三（福・非福・不動行）に入るので、意味としては、福行等〔の三行〕のみによって無明が条件であることが知られるべきである⁴³。

Vism は「身・語・心行」を「福・非福・不動行」に組み込んでいる。Vibh の「六行」説を継承しつつも、実質的には「福・非福・不動行」の三行で理解していることになる。

有とはここにおいては業有のみを意味する。それ（業有）が生起有の条件であって生起有が〔生の条件では〕ないからである⁴⁴。

Vism は「生起有」を「生」の条件として認めず、「生」の条件を「業有」に限定する。「業有」だけが「生」の条件として理解されるのである⁴⁵。

また、Vism は、「識・名色」を無色有や無想有の「諸蘊」を含めて解釈し⁴⁶、「生」を「諸蘊の出現」「母胎から出るまでの諸蘊」「結生蘊」「諸蘊の最初の出現」と定義するので⁴⁷、「識・名色」と「生」は共に「諸蘊」として理解できるものになっている。従って、〈諸行⇒識⇒名色〉と〈有⇒生〉の因果関係は【図2】のように「業⇒諸蘊」という関係になる。Vibh を図示した【図1】に比べ、より簡潔な対応関係になっていることが見て取れよう。

【図2】

諸行 ⇒ 識⇒名色	=	福行・非福行・不動行	⇒	諸蘊（識・名色）
有 ⇒ 生	=	業有（福行・非福行・不動行 ⁴⁸ ）	⇒	諸蘊（生）

しかも、「諸行」は「過去の業による今世における結生 (paṭisandhi) の条件」として、「有」は「現在の業による来世における結生の条件」として理解されている⁴⁹から、ここにおける「諸蘊」は「再生」を含意している。つまり、「業⇒再生」という関係が成立しているのである。

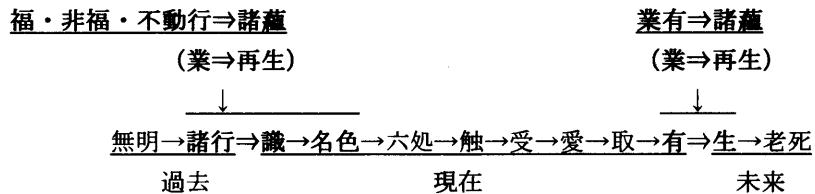
2-3. Visuddhimagga の「三時」解釈

Vism は 3-1 の定義と 3-2 の作業により縁起支レベルの解釈を施す一方で、十二支縁起全体について次のような視点を提示する。

無明と諸行の二支は過去の時である。識に始まり有に終る八〔支〕は現在の時である。生と老死の二〔支〕は未来の時である、と知られるべきである⁵⁰。

無明・諸行を過去に、生・老死を未来に配当することで十二支縁起を三時に分ける解釈は、Vism 以前の上座部大寺派文献には確認できないものである。十二支を三時に配当する解釈を【図 2】の縁起支定義と組み合わせると、Vism の三世両重因果説は、【図 3】のように図示できる。

【図 3】



過去から現在の連結部分である「諸行⇒識⇒名色」と、現在から未来の連結部分である「有⇒生」が、「業⇒再生」という因果関係として解釈されている。Vism が Vibh の縁起支定義を採用したのも、身・語・心行や生起有に解釈を加えて「諸行⇒識⇒名色」と「有⇒生」の対応性を明確にしたのも、十二支縁起を三世に渡る因果関係として理解するための論理的要請に基づくものだったことが分かる。

2-4. Visuddhimagga の「無明」定義

ここでは、2-1 から 2-3 で論じた三世両重因果説の確立を踏まえて、Vism の「無明」定義を考察しよう。

「無明」とは、經典説によれば苦などの四つの道理（四諦）に対する無知である。アビダナマ説によれば、過去等と共に八〔つの道理に対する無知である〕。次のように説かれる。「その内、無明とは何か。苦に対する無知、苦の原因に対する無知、苦の滅に対する無知、苦の滅に至る道に対する無知、過去に対する無知、未来に対する無知、過去・未来に対する無知、此縁性・縁已生法に対する無知である」と⁵¹。

Vism は、Vibh-s や Vibh による無明の定義を經典説として継承する一方で、「四諦、過去、未来、過去未来、此縁性・縁已生法に対する無知」をアビダナマ説として新たに導入する⁵²。更に、アビダナマ説の後半を、「過去と呼ばれる過去の五蘊、未来と呼ばれる未来の五蘊、過去・未来と呼ばれるその両者、此縁性・縁已生法と呼ばれる此縁性と縁已生法⁵³」と言い換えている。

つまり、Vism は「過去の五蘊」「未来の五蘊」や「此縁性⁵⁴」「縁已生法」を示した定義を加えたのである。この定義は、「四諦」のみを無知の対象とする従来の定義（經典説）

に比べ、「過去」や「未来」に「縁起支」を振り分ける縁起解釈と一層明確に対応するから、アピダンマ説の導入は三世両重因果説の確立と呼応した編集作業だと考えられる。

Ⅲ. 律註と四部ニカーヤ註における縁起註釈の基本姿勢

上座部大寺派には、ブッダゴースア作とされる⁵⁵律の註釈書と四部ニカーヤの註釈書（以下、四部註）が伝わっている。Vinaya 註の *Samantapāsādikā* (=Smp), *Dīghanikāya* 註の *Sumaṅgalavilāsini* (=DA), *Majjhimanikāya* 註の *Papañcasūdanī* (=MA), *Samyuttanikāya* 註の *Sāraṭṭhappakāsini* (=SA), *Anguttaranikāya* 註の *Manorathapūranī* (=AA) である。以上の五書は、それぞれ縁起説を註釈しなければならない個所で、次のように述べる。

【Smp】 だが、詳細な、全ての様相を具えた〔縁起の〕決定説を望む者は、*Visuddhimagga* や *Sammohavinodanī* という大 *Vibhaṅga* 註に基づいて把握すべきである⁵⁶。

【DA】 以上が略説であるが、縁起説は詳細に *Visuddhimagga* で既に説かれた⁵⁷。ここで詳細に縁起説が説かれるべきであるが、それは *Visuddhimagga* で既に説かれた⁵⁸。

【MA】 「比丘たちよ、無明を条件として諸行がある。乃至、苦蘊の生起がある」という

ここで縁起説が詳説されるべきであるが、それは *Visuddhimagga* で詳説された⁵⁹。

【SA】 だが、詳細に全ての様相を具えた順観の縁起説は *Visuddhimagga* で既に説かれたので、それ（縁起説）はそこで説かれたことによって把握されるべきである⁶⁰。

【AA】 その全ては、全ての様相に関して、*Visuddhimagga* で詳説された。そこで説かれた道理によってのみ知られるべきである⁶¹。

いずれも、*Vism* で縁起が詳しく論じられたことに言及し、縁起に対する註釈を省いたり、略説や補足説明に止めている。*Vism* に詳説を譲っているのである。

これと同様の態度は、各四部註の冒頭に掲げられる偈にも確認できる。三宝への帰依に始まるこの偈は、次のように最後を結んでいる（各四部註の偈はほぼ同一の文章）。

戒論、頭陀法、業処、も全て、修行の次第を具えた禪定と等至の詳説と、また一切の神通と智慧に基づく定説、〔五〕蘊、〔十八〕界、〔十二〕処、〔二十二〕根、更に四聖諦、条件の様相⁶²の教説（縁起説）と、極めて清らかな趣旨と、聖典の道から離れることなき観察の修習、これら全ては *Visuddhimagga* で私が完全に説いたので、ここで、さらに繰返して考察しないだろう。なぜなら、この *Visuddhimagga* は、四部アーガマの中であって、そこで説かれたとおりの意味を明らかにするだろうからである。まさにこのように作られているのだから、それ（*Visuddhimagga*）をもこの註釈と共に把握して、『長部』（SA：『相応部』、AA：『増一部』）に基づく意味（MA：『中部』の合誦の意味）を知るがよい、と⁶³。

四部註は *Vism* の構成を俯瞰し、その一つに縁起説を数えた上で、同じ内容を繰返さないことを言明している。更に、四部註と共に *Vism* を併せて学ぶことによって、四部ニカーヤの内容を理解するよう勧められているのである。

以上の縁起註釈部分と四部註冒頭の偈から明らかなように、註釈書を通して読む限りは、

律や四部ニカーヤの縁起説は Vism に基づいて理解される仕組みになっているのである。

IV. 結論

本稿の結論は次の三項目にまとめられる。また、Vibh-s→Vibh→Vism における縁起支定義の伝承過程は【表 2】のように示すことができる。

- ① *Vibhaṅga* は、*Vibhaṅgasutta* の縁起支定義の内、「諸行」「名」「有」の定義を改変し、<諸行⇒識⇒名色>と<有⇒生>に対応性を生み出すことで、十二支縁起を過去世から来世に渡る因果関係として解釈することを可能にした。その結果、*Visuddhimagga* の縁起支定義の論拠となり、上座部大寺派の縁起理解に決定的な役割を果たした。
- ② *Visuddhimagga* は、*Vibhaṅgasutta* ではなく *Vibhaṅga* の縁起説を継承した上で、「諸行」を「福行・非福行・不動行」に収斂し、<有⇒生>の「有」を「業有」に限定した。この解釈により、<諸行⇒識⇒名色>と<有⇒生>に<業⇒再生>という簡潔な対応関係が成立し、十二支縁起中に二度の転生を認める三世両重因果説が明確になった。また、三世両重因果説の確立に呼応して、「無明」定義にアビダンマ説が導入され、無明の対象が増広された。
- ③ *Samantapāsādikā* と四部ニカーヤ註は *Visuddhimagga* に縁起の詳説を譲っており、また、四部ニカーヤ註は冒頭の帰敬偈で *Visuddhimagga* と併せて学ぶように勧めている。註釈書を通して読む限り、律や四部ニカーヤの縁起説は Vism に基づいて理解される仕組みになっている。

【表 2】縁起支定義の変遷

	諸行 (saṅkhārā)	名 (nāma)	有 (bhava)
Vibh-s	身行・語行・心行	受・想・思・触・作意	欲有・色有・無色有
Vibh	福行・非福行・不動行 身行・語行・心行	受蘊・想蘊・行蘊	業有・生起有
Vism 括弧内は条件付	福行・非福行・不動行 (・身行・語行・心行)	受蘊・想蘊・行蘊	業有 (・生起有)

<略号・使用テキスト>

- AA = *Manorathapūraṇī*, Pali Text Society.
 DA = *Sumaṅgalavilāsini*, Pali Text Society.
 MA = *Papañcasūdanī*, Pali Text Society.
 SA = *Sāratthappakāsinī*, Pali Text Society.
 Smp = *Samantapāsādikā*, Pali Text Society.
 SN = *Samyuttanikāya*, Pali Text Society.
 Vibh = *Vibhaṅga*, Pali Text Society.
 Vism = *Visuddhimagga*, Harvard Oriental Series.

(注記)

¹ 本稿では、アッタカターが度々批判する無畏山寺派 (Abhayagirivāsin : 無畏山寺住者) と区別するために、「上座部大寺派 (Mahāvihāravāsin : 大寺住者)」という呼称を採用する。インドで成立した経典やアビダンマも、「大寺派所伝」という意味で「上座部大寺派」と呼ぶこととする。

² 上座部大寺派の縁起説の思想的文脈は、大きく分けて三種あると言えるだろう。第一に、本稿で扱う Vibh-s → Vibh → Vism という流れである。この流れは、無明・諸行を過去世に、生・老死を来世に、それ以外を現世に配当する「三時 (ti-kāla)」タイプの三世両重因果説の理論的根拠を形成する。第二に、Paṭisambhidāmagga → Vism という流れであり、「二十行相 (visatiākāra)」タイプの三世両重因果説が説かれる。これは、無明・諸行・渴愛・取・有を「業輪転 (kammavatta)」とし、識・名色・六処・触・受を「異熟輪転 (vipākavatta)」とし、前者 (因) と後 (果) を「前世の業因」「現世の異熟果」「現世の業因」「来世の異熟果」に配当して、合計二十項目で縁起を理解するものである。「三時」タイプと異なり、生・老死を無視する点に特徴がある。この解釈は、Vism が識・名色・六処・触・取を「異熟」に解釈している点に反映している。第三に Paṭṭhāna → Vism の流れの「二十四縁」説である。これは、Vism の〈無明→諸行〉の個所で詳論されている。Vism の縁起説全体の理解には、以上のような複数の思想的文脈を把握する必要があるだろう。その内、林寺正俊[1998]は第二のタイプの「二十行相」に関するもので、「異熟輪転」に属する「名」が Vism で「異熟・非異熟」の両方に解釈される教学的背景を論じた興味深い考察である。また、浪花宣明[1995]は第三のタイプの「二十四縁」に関するもので、「二十四縁」がそれぞれ詳細に解説され、その大綱を知るのに有益である。一方、本稿は、第一のタイプの縁起解釈が成立する過程を調査することを目的としている。

³ Vibh は各章が経分別 (Suttantabhājanīya) とアビダンマ分別 (Abhidhammabhājanīya) に分かれている。経分別は諸法を経的に説明するもので、アビダンマ分別はアビダンマ特有の分析や考察を加えるものである。縁起を説く章である「縁相分別」にもアビダンマ分別が存在するが、アビダンマ分別における縁起解釈は「パーリ文献の他の場所にも全く見られない独特のものである」(水野弘元[1997]236.13-4)。本稿は、「経典→アビダンマ→註釈書」という思想的文脈で縁起説を考察することを目的としているので、ここでは、アビダンマ分別については触れない。

⁴ Vibh-s 以外で縁起支を定義する経は、十二縁起支中の一部の定義が欠けていたり、十二支ではない縁起説を説いている。例えば、SN Nidānavagga 27, 28, 33 の諸経は無明の定義を欠いている。DN Mahānidānasutta は九支縁起を説く経である。MN2 Sammādhīṭṭhisutta は十二縁起支全てを定義してはいる (Vibh-s と同一の定義) が、無明の条件として漏 (āsava) を加えた十三支縁起説を説く。また、その十三支縁起と四諦が組み合わせられて説示されており、Vibh のように単独で十二支縁起説が提示されているわけではない。

⁵ Vibh-s が Vibh の縁起説の源泉経となったことは、水野弘元[1997] (29.note14) (103.note6)

においても指摘されている。

⁶ SN II 4.10-14: Yaṃ kho bhikkhave dukkhe aññāṇaṃ dukkhasamudaye aññāṇaṃ dukkhanirodhe aññāṇaṃ dukkhanirodhagāminiyā paṭipadāya aññāṇaṃ. Ayaṃ vuccati bhikkhave avijjā.

⁷ Vibh135.9-11: Dukkhe aññāṇaṃ dukkhasamudaye aññāṇaṃ dukkhanirodhe aññāṇaṃ dukkhanirodhagāminiyā paṭipadāya aññāṇaṃ: ayaṃ vuccati bhikkhave avijjā.

⁸ SN II 4.8-10: Tayo me bhikkhave saṅkhārā kāyasāṅkhāro vacisaṅkhāro cittasaṅkhāro. Ime vuccanti bhikkhave saṅkhārā.

⁹ SN II 4.5-7: Cakkhaviññāṇaṃ sotaviññāṇaṃ ghānaviññāṇaṃ jivhāviññāṇaṃ kāyaviññāṇaṃ manoviññāṇaṃ. Idaṃ vuccati bhikkhave viññāṇaṃ.

¹⁰ Vibh136.2-4: Cakkhaviññāṇaṃ sotaviññāṇaṃ ghānaviññāṇaṃ jivhāviññāṇaṃ kāyaviññāṇaṃ manoviññāṇaṃ: idaṃ vuccati saṅkhārapaccayā viññāṇaṃ.

¹¹ SN II 3.34-35: Vedanā saññā cetanā phasso manasikāro. Idaṃ vuccati nāmaṃ

¹² SN II 3.35-4.2: Cattāro ca mahābhūtā catunnañ ca mahābhūtānaṃ upādāyarūpaṃ, idaṃ vuccati rūpaṃ.

¹³ Vibh136.11-12: Cattāro ca mahābhūtā catunnañ ca mahābhūtānaṃ upādāya rūpaṃ; idaṃ vuccati rūpaṃ.

¹⁴ SN II 3.30-33: cakkhāyatanam sotāyatanam ghānāyatanam jivhāyatanam kāyāyatanam manāyatanam. Idaṃ vuccati bhikkhave saḷāyatanam.

¹⁵ Vibh136.16-18: Cakkhāyatanam sotāyatanam ghānāyatanam jivhāyatanam kāyāyatanam manāyatanam: idaṃ vuccati nāmarūpapaccayā saḷāyatanam.

¹⁶ SN II 3.27-29: Cakkhusamphasso sotasamphasso ghānasamphasso jivhāsamphasso kāyasamphasso manosamphasso. Ayaṃ vuccati bhikkhave phasso.

¹⁷ Vibh20-22: Cakkhusamphasso sotasamphasso ghānasamphasso jivhāsamphasso kāyasamphasso manosamphasso: ayaṃ vuccati saḷāyatanapaccayā phasso.

¹⁸ SN II 3.22-26: Cakkhusamphassajā vedanā sotasamphassajā vedanā ghānasamphassajā vedanā jivhāsamphassajā vedanā kāyasamphassajā vedanā manosamphassajā vedanā. Ayaṃ vuccati bhikkhave vedanā.

¹⁹ Vibh136.24-27: Cakkhusamphassajā vedanā sotasamphassajā vedanā ghānasamphassajā vedanā jivhāsamphassajā vedanā kāyasamphassajā vedanā manosamphassajā vedanā: ayaṃ vuccati phassapaccayā vedanā.

²⁰ SN II 3.17-19: Rūpaṇhā saddaṇhā gandhaṇhā rasaṇhā phoṭṭhabbaṇhā dhammaṇhā. Ayaṃ vuccati bhikkhave ṭaṇhā.

²¹ Vibh.136.29-30: Rūpaṇhā saddaṇhā gandhaṇhā rasaṇhā phoṭṭhabbaṇhā dhammaṇhā: ayaṃ vuccati vedanāpaccayā ṭaṇhā.

²² SN II 3.13-15: kāmupādānaṃ diṭṭhupādānaṃ silabbatupādānaṃ attavādupādānaṃ. Idaṃ vuccati bhikkhave upādānaṃ.

²³ Vibh136.32-33: Kāmupādānaṃ diṭṭhupādānaṃ silabbatupādānaṃ attavādupādānaṃ: idaṃ vuccati taṇhāpaccayā upādānaṃ.

²⁴ SN II 3.11-12: kāmabhavo rūpabhavo arūpabhavo. Idaṃ vuccati bhikkhave bhavo.

²⁵ Vibh137.14-16: Yā tesam tesam sattānaṃ tamhi tamhi sattanikāye jāti sañjāti okkanti abhinibbatti khandhānaṃ pātubhāvo āyatanānaṃ paṭilābho: ayaṃ vuccati bhavapaccayā jāti.

²⁶ SN II 3.6-8: Yā tesam tesam sattānaṃ tamhi tamhi sattanikāye jāti sañjāti okkanti abhinibbatti khandhānaṃ pātubhāvo āyatanānaṃ paṭilābho. Ayaṃ vuccati bhikkhave jāti.

²⁷ Vibh137.20-22: Yā tesam tesam sattānaṃ tamhi tamhi sattanikāye jarā jiraṇatā khaṇḍiccam pāliccam valittacatā āyuno saṃhāni indriyānaṃ paripāko: ayaṃ vuccati jarā.

²⁸ SN II 2.28-30: Yā tesam tesam sattānaṃ tamhi tamhi sattanikāye jarā jiraṇatā khaṇḍiccam pāliccam valittacatā āyuno saṃhāni indriyānaṃ paripāko. Ayaṃ vuccati jarā.

²⁹ Vibh137.24-27: Yā tesam tesam sattānaṃ tamhā tamhā sattanikāyā cuti cavanatā bhedo antaradhānaṃ maccu maraṇaṃ kālakiriyā khandhānaṃ bhedo kaḷavarassa nikkhepo jīvitindriyassa upacchedo: idaṃ vuccati maraṇaṃ.

³⁰ SN II 2.30-4: Yaṃ tesam tesam sattānaṃ tamhā tamhā sattanikāyā cuticavanatā bhedo antaradhānaṃ maccumaraṇaṃ kālakiriyā khandhānaṃ bhedo kaḷavarassa nikkhepo. Idaṃ vuccati maraṇaṃ.

³¹ Vibh135.12-14: katame avijjāpaccayā saṅkhārā? Puññābhisaṅkhāro apuññābhisaṅkhāro āneñjābhisaṅkhāro kāyasāṅkhāro vacisaṅkhāro cittasāṅkhāro.

³² Vibh136.7-9: katamaṃ nāmaṃ? Vedanākkhandho saññākkhandho saṅkhārakkhandho: idaṃ vuccati nāmaṃ.

³³ Vibh136.34-137.11: katamo upādānapaccayā bhavo? Duvidhena bhavo: atthi kammabhavo, atthi upapattibhavo. Tattha katamo kammabhavo? puññābhisaṅkhāro apuññābhisaṅkhāro āneñjābhisaṅkhāro: ayaṃ vuccati kammabhavo. Sabbam pi bhavagāmikammaṃ kammabhavo. Tattha katamo upapattibhavo? Kāmabhavo rūpabhavo arūpabhavo saññābhavo asaññābhavo nevasaññānāsaññābhavo ekavokārabhavo catuvokārabhavo pañcavokārabhavo: Ayaṃ vuccati upapattibhavo.

³⁴ Vibh の縁起説については既に次のような指摘がある。「経では身語意の三を行とし、苦楽捨の三を受とし、欲愛・有愛・無有愛の三を愛とし、欲有・色有・無色有の三を有とするのに対して、本論では行を福・非福・不動・身・語・意の六行とし、受を眼触所生受等の六とし、愛を色愛ないし法愛の六とし、有を業有・起有に分ち、業有 (kamma-bhava) を福・非福・不動の三行および有に至る一切業とし、起有 (uppatti-bhava) を欲有・色有・無色有・想有・無想有・非想非非想有・一蘊有 (ekavokāra-bhava) ・四蘊有・五蘊有としている。」(水野弘元[1997] 227.13-17) しかし、「福・非福・不動行」は SN Nidānavagga51 Parivimsananasutta において説かれている。また、ニカーヤにおいて縁起支としての愛は「六愛」であり、受は「三受」よりも「六受」とする例が多い。更に、名色の定義がニカ

一ヤでは「受・想・思・触・作意」であるのに、Vibh では「受・想・行蘊」に変わっている点も付け加えるべきだろう。

³⁵ Bucknell, R.S.[1999]は Vibh が Vibh-s を踏襲していることを指摘してはいるものの、Vibh の改変を「名」のみに限定している (336.21-6)。しかし、本論で述べるように、Vibh の縁起支定義の改変は「名」のみならず「諸行」「有」にも及んでおり、この点は訂正を要する。

³⁶ Vibh-s との関連は触れられていないが、Vibh に「業有」説が説かれること自体はこれまで度々指摘されている。cf. 赤沼智善[1925], 木村泰賢[1937], 村上真完[2000]。

³⁷ Vibh-s と Vibh には、「諸行」「名」「有」定義に加えて、もう一点、重要な相違がある。縁起支を定義する際、Vibh-s では、老死の定義に始まり無明の定義で終わっていた順番が、Vibh では無明の定義に始まり老死の定義に終わるという順序に逆転しているのである。過去世から未来世へ向う三世両重因果説にとって、縁起説は、無明(過去)に始まり老死(未来)で終るものでなければならない。Vibh が三世両重因果説で解釈するのに都合がよい体裁に換えた可能性がある。

³⁸ Vism は、「識」「触」「受」「愛」「取」を以下のように定義する。識=眼・耳・鼻・舌・身・意識 (Vism464.23-24)；触=眼・耳・鼻・舌・身・意触 (Vism483.23-9)；受=眼・耳・鼻・舌・身・意触所生受 (Vism485.6-11)；愛=色・声・香・味・触・法愛 (Vism485.32-486.4)；取=欲・見・戒禁・我語取 (Vism487.1-17) これらの定義の多くは、Vism の要約説として提示されており、詳説した場合はさらに定義が複雑になるが、基本的に以上のような内容が説かれている。「六処」に関しては、少々状況が複雑である。Vism は「六処」に対して二種の見解を列挙している (Vism483.35-484.26)。第一は、因としても果としても「六処」は「眼・耳・鼻・舌・身・意処」だという見解。第二は、因としては「眼・耳・鼻・舌・身・意」でも、果としては「眼・耳・鼻・舌・身・意処」と「色・声・香・味・触・法処」の両方とする見解である。だが、いずれにしても、「六処=眼・耳・鼻・舌・身・意処」という伝統説が否定されているわけではない。なお、「無明」については2-4 で論じる。

³⁹ Vism 448.27-28: puññāpuññāneñjābhisāṅkhārā tayo, kāya-vacī-cittasāṅkhārā tayo ti ime cha avijjāpaccayā saṅkhārā.

⁴⁰ Vism 477.16-17: nāman ti ārammaṇābhīmukhaṃ namanato vedanādayo tayo khandhā.

⁴¹ Vism 489.8-10: bhavatī ti bhavo. So kammabhavo, upapattibhavo cā ti duvidho hoti. Yath'āha: "Bhavo duvidhena: atthi kammabhavo, atthi upapattibhavo" ti.

⁴² Vism452.1-3: kāyasañcetanā kāyasāṅkhārā, vacīsañcetanā vacīsāṅkhārā, manosañcetanā cittasāṅkhārā. Ayaṃ tiko kammāyūhanakkhaṇe puññābhisāṅkhārādīnaṃ dvārato pavattidassanattamaṃ vutto.

⁴³ Vism452.12: Iti ayaṃ tiko purimattikam eva pavisatī ti atthato puññābhisāṅkhārādīnaṃ yeva vasena avijjāya paccayabhāvo veditabbo.

⁴⁴ Vism493.10-13: Bhavo ti pan'ettha kammabhavo va adhippeto. So hi jātiyā paccayo; na

uppattibhavo.

⁴⁵ 村上真完[2000]は部派仏教の縁起説における「有」について論じる中で、Vism や『法蘊足論』で生の条件が業有に限られていることを指摘し、『俱舍論』やパーリ聖典においても生起有を生の条件として解釈し難い例を挙げている。

⁴⁶ 「生起有」に一蘊有・四蘊有が含まれることから分かるように、衆生は必ずしも全五蘊を指すわけではなく、「無色有」「無想有」のような衆生も存在する。Vism は「識」「名色」を「五蘊」に限定するのではなく、「五蘊有」以外の衆生の「諸蘊」をも含め、拡大解釈している。結果的に、この拡大解釈は、生の定義との一致をもたらすことになった。

Vism478.24-5: *Arūpīnaṃ pana tayo va arūpino khandhā. āsaññīnaṃ rūpato jīvitindriyanavakaṃ evā ti. Esa tāva paṭisandhiyaṃ nayo.* 「次に、無色〔有の〕者には三非色蘊のみが〔生起し〕、無想〔有の〕者には色として命根九法のみが〔生起する〕。まず、以上が結生における道理である」

⁴⁷ Vism463.26: *sabbattha khandhānaṃ pātubhāvo jāti.* 「あらゆる場合の諸蘊の出現が生である」 Vism423.29-33: *Svāyam idha gabbhaseyyakānaṃ paṭisandhito paṭṭhāya yāva mātukucchimhā nikkhamanaṃ, tāva pavattesu khandhesu; itaresaṃ paṭisandhikhandhesevā ti daṭṭhabbo. Ayam pi ca pariyāyakathā va. Nippiyāyato pana tattha tattha nibbattamānānaṃ sattānaṃ ye ye khandhā pātubhavanti, tesam tesam paṭhamapātubhāvo jāti nāma.* 「ここで〔生とは〕胎生者が結生以後母胎から出るに至るまで生起する諸蘊を意味している。他の者（湿生者・卵生者・化生者）は結生蘊のみを意味していると知るべきである。以上が經典説である。次にアビダツマ説によれば、それぞれに生じつつある衆生に出現する諸蘊の最初の出現が生と呼ばれる」 なお、後者の「生」の定義は「〔四〕諦品 (Saccaniddesa)」でなされている。Vism が縁起を解説する「慧地品 (Paññābhūminiddeśa)」は、「諦品」より後にあるため、「生」の詳しい解説を「諦品」に譲っているのである。Vism493.9-10: *Bhavapaccayā jāti ti ādisu jāti-ādīnaṃ vinicchayo saccaniddese vuttanayen'eva veditabbo.* 『有を条件として生がある』等に関する生等の定説は諦品において説かれた見方で知られるべきである」

⁴⁸ Vism は、Vibh 同様、「業有」に「福・非福・不動行」を含めている。ただし、相違点もある。「諸行」は「福・非福・不動行」に全て収まるのに対し、「業有」には「福・非福・不動行」と共に「意思に関連した食欲等の業と呼ばれる諸法」も含まれるからである (Vism490.14-17)。これも Vism が Vibh の「有」の定義を継承した結果である。

⁴⁹ Vism490.10-14: *yathā ca bhavaniddeśe, tath'eva kāmaṃ saṅkhāraniddeśe pi puññābhisaṅkhārādayova vuttā; evaṃ sante pi purime atītakammavasena idha paṭisandhiyā paccayattā, ime paccuppannakammavasena āyatim paṭisandhiyā paccayattāti punavacanaṃ sātthakameva.*

⁵⁰ Vism496.9-11: *avijjā saṅkhārā cā ti dve aṅgāni atītakālāni; viññāṇādini bhavāvasanāni aṭṭha paccuppannakālāni; jāti c'eva jarāmāraṇaṃ ca dve anāgatakālāni ti veditabbāni.*

これと同様の見解は他部派の論書にも確認できる。

『発智論』 T26.921b17-19 ; 『大毘婆沙論』 T27.117a27-29 : 二過去. 謂無明行. 二未來. 謂生老死. 八現在. 謂識名色六処触受愛取有.

『解脱道論』 T32.450c19-20 : 二過去無明及行. 二未來生老死. 餘八現在.

⁵¹ Vism451.11-16: *Avijjā ti suttantapariyāyena dukkhādisu catūsu ṭhānesu aññāṇaṃ; Abhidhammapariyāyena pubbantādihi saddhim aṭṭhasu. Vuttaṃ h'e taṃ: "Tattha katamā avijjā? Dukkhe aññāṇaṃ ...pe... dukkhanirodhagāminiyā paṭipadāya aññāṇaṃ, pubbante aññāṇaṃ, aparante ... pubbantāparante ... idappaccayatāpaṭiccasamuppannesu dhammesu aññāṇaṃ"* ti.

⁵² Vism がアビダダマ説として挙げる無明の定義は, *Cullaniddesa* (Burmese edition: 25.12-21) の *avijjā*, *Dhammasaṅgani*390, 1061 の *moha*, *Dhammasaṅgani*1100 の *avijjāsava*, *Dhammasaṅgani*1123 の *avijjāsaññojana*, *Dhammasaṅgani*1162 の *avijjānivarāṇa*, *Vibhaṅga* (85.35-86.2) の *avijjādhātu*, これらの定義と同じ内容である. ただし, いずれも縁起支としての無明を定義したものではない. この定義を縁起支定義に導入した点が Vism の独創である.

⁵³ Vism451.21-25: *pubbantasāṅkhātāṃ atītaṃ khandhapañcakāṃ, aparantasāṅkhātāṃ anāgatāṃ khandhapañcakāṃ, pubbanataparantasāṅkhātāṃ tad ubhayam; idappaccayatā-paṭiccasamuppanna-dhamma-sāṅkhātāṃ idappaccayatāñ c'eva paṭiccasamuppannadhamme ca paṭiccādetvā tiṭṭhati.*

⁵⁴ 松田慎也[1980], 浪花宣明[1991a][1991b]により明らかにされているように, Vism をはじめとするアッタカターで此縁性 (*idappaccayatā*) は「これらにとっての諸条件 (*imesaṃ paccayā*)」「これらにとっての諸条件の集合」と解釈される (Vism441.21-23). 従って, 「此縁性と縁已生法」とは縁起支の「因と果」を意味していることになる.

⁵⁵ 森祖道[1984](469-470)によると, 従来の研究では, Smp と四部ニカーヤ註はブッダゴースアの真作として認められている.

⁵⁶ Vinaya の Mahāvagga の冒頭でブッダが十二支縁起を観察する個所の註釈部分である.

Smp I 953.25-28: *vitthārato pana sabbākārasampannaṃ vinicchayaṃ icchantena Visuddhimaggato ca Sammohavinodaniyā ca Mahāvibhaṅgaṭṭhakathāya gahetabbo.*

なお, PTS 版の異読やビルマ(第六結集)版, スリランカ (SHB) 版では, *ca Sammohavinodaniyā ca Mahāvibhaṅgaṭṭhakathāya* が欠けている. この差違は注意を要するが, Vism に縁起の詳説を譲っている点では諸本全て共通している.

⁵⁷ DN I Brahmajālasutta で説かれる縁起説の註釈部分である.

DA I 125.29-30: *Ayam ettha saṃkhepo, vitthārato pana paṭiccasamuppādakathā Visuddhimagge vuttā.*

⁵⁸ DN14 Mahāpadānasutta で十支縁起が観察される個所の註釈部分である.

DA II 459.36-460.2: *Imasmim ṭhāne vitthārato Paṭiccasamuppādakathā kathetabbā, sā panesā Visuddhimagge kathitā va.*

⁵⁹ MN38. Mahāsāṅkhasutta で説かれる十二支縁起の註釈部分である.

MA II 308..17-20: *Iti kho, bhikkhave, avijjāpaccayā saṃkhārā - pe- dukkhakkhandhassa samudayo*

hoñi ti ettha pana pañiccasamuppādakathā vitthāretabbā bhavēyya, sā Visuddhimagge vitthāritā va.

⁶⁰ SN Nidānavagga1. Desanāsutta で説かれる十二支縁起の註釈である。

SA II 10.5-8: vitthārena pana sabbākārasampannā anulomapañiccasamuppādalathā Visuddhimagge kathitā, tasmā sā tasmim kathitavaseneva gahetabbā.

⁶¹ AN Tikanipāta7 Mahāvagga1 Tithāyatanādisutta で説かれる四諦の註釈である。この経は十二支縁起の流転分・還滅分を集諦・滅諦として説くので、十二支縁起も含意していると考えられる。

AA III 283.5-7: taṃ sabbam sabbākārena Visuddhimagge vitthāritam eva. tattha vuttanāyena eva veditabbam.

⁶² 松田慎也[1980], 浪花宣明[1991a][1991b], 片山一良[1992] により詳しく論じられているように、上座部大寺派は「縁起」を「条件となる法 (paccayadhamma)」と定義し (Vism440.26), 「依存生起」という理解を斥ける。おそらく、その理由から、アッタカタ文献ではしばしば「生起」の語感が残る pañiccasamuppāda という語よりも「条件の様相」「条件あり方」を意味する paccayākāra という語がしばしば用いられるが、共に縁起説を指している点は変わらない。

⁶³ DA I 1.25-2.9 (MA I 2.1-13, SA I 2.9-21, AA I 2.15-2.3):

Sīlakathā dhutadhammā kammaṭṭhānāni c'eva sabbāni (MA: sabbā),

Cariyāvīdhānasahito jhānasamāpattivithāro

Sabbā ca abhiññāyo paññāsañkalanānicchayo c'eva

Khandhadhātāyatanāndriyāni (MA, SA, AA: khandhā dhātāyatanāndriyāni) ariyāni c'eva cattāri

Saccāni paccayākāradesanā supārisuddhanipūṇanayā

Avimuttatantimaggā vipassanā bhāvanā c'eva

Iti pana sabbam yasmā Visuddhimagge mayā supārisuddham

Vuttaṃ tasmā bhīyo na taṃ idha vicārayissāmi.

Majjhe Visuddhimaggo esa catunnam pi āgamānam hi

Ṭhatvā pakāsayissati tattha yathā bhāsitaṃ atthaṃ

Iceva kato tasmā taṃ pi gahetvāna saddhim etāya

Atṭhakathāya vijānatha dīghāgamanissitaṃ (MA: Majjhimsaṅgītiyā, SA: Saṃyuttanissitaṃ,

AA: Aṅguttanissitaṃ) atthaṃ ti.

<参考文献>

赤沼智善 [1925] 「十二因縁の伝統的解釈に就いて」『宗教研究』2-1；後、『佛教教理之研究』（1981，京都：法蔵館）に再録（475-498）。

宇井伯寿 [1926] 『印度哲学研究』第二，東京：岩波書店。

梶山雄一 [1984] 「輪廻と超越—『城邑経』の縁起説とその解釈」『哲学研究』550, 324-359。

- 片山一良 [1992] 「伝統仏教における縁起説」『ブツダから道元へ』107-117, 東京: 東京書籍.
- 木村泰賢 [1922] 『原始仏教思想論』, 東京: 丙牛出版社; 再版 (1968, 東京: 大法輪閣).
[1937] 『小乗仏教思想論』, 東京: 明治書院; 再版 (1968, 東京: 大法輪閣).
- 三枝充憲 [1978] 『初期仏教の思想』, 東京: 第三文明社.
- 中村 元 [1971] 『原始仏教の思想』下, 東京: 春秋社.
- 浪花宣明 [1991a] 「パーリ上座部の縁起の語義解釈」『仏教研究』20, 81-106.
[1991b] 「パーリ上座部の縁起の語義研究」『南都仏教』65, 1-19.
[1995] 「パーリ二十四縁説の研究」『仏教研究』24, 147-164.
[2000] 「パーリ上座部の縁起説」『アビダルマ仏教とインド思想』165-207, 東京: 春秋社.
- 林寺正俊 [1998] 「*Visuddhimagga* における縁起解釈の一考察—異熟支分について—」『印度哲学仏教学』13, 131-146.
- 平川 彰 [1988] 『法と縁起』, 東京: 春秋社.
- 舟橋一哉 [1952] 『原始仏教思想の研究』, 京都: 法蔵館.
- 松田慎也 [1980] 「『第一義宝函』における縁起解釈」『印度学仏教学研究』28-2, 678-679.
- 水野弘元 [1964] 『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』, 東京: ピタカ社.
[1997] 『パーリ論書研究』, 東京: 春秋社.
- 村上 (平野) 真完
[1965] 「縁起成道説資料」『印度学仏教学研究』13-1, 187-191.
[2000] 「縁起説と無常説と多元論的分析的思考法 (1)」『仏教研究』29, 31-67.
- 森 章司 [1995] 『原始仏教から阿毘達磨への佛教教理の展開』, 東京: 東京堂出版.
- 森 祖道 [1984] 『パーリ仏教注釈文献の研究』, 東京: 山喜房.
- 和辻哲郎 [1927] 『原始仏教の実践哲学』, 東京: 岩波書店.
- Aramaki, N. [1985] On the Formation of a short prose *Pratīyasamutpādasūtra*, 『雲井昭善博士古稀記念 仏教と異宗教』, 京都: 平楽寺
- Bucknell, R.S. [1999] Conditioned Arising Evolves: Variation and Change in Textual Accounts of the *Paṭicca-samuppāda* Doctrine, *JIABS*22-2, 311-342.
- Schmithausen, L.[2001] Zur zwölfgliedrigen Formel des Entsehens in Abhängigkeit, *Horin*7, 41-76.

2002, 12, 18 稿

ばば のりひさ 東京大学大学院博士課程

Changes in the Interpretation of the *Paṭiccasamuppādaṅgas*:

On the interpretation of *Paṭiccasamuppāda* theory in the Mahāvihāra Theravāda tradition

BABA, Norihisa

The Interpretation of the *Paṭiccasamuppādaṅgas* in the Mahāvihāra Theravāda tradition changed in the order of the “Vibhaṅgasutta”, *Vibhaṅga*, *Visuddhimagga*, and the commentaries on the Vinaya and the four Nikāyas. In this paper, I examine the process of change in these different interpretations.

- (1) The “Vibhaṅgasutta” (*Samyuttanikāya* Nidānavagga2) is the only sutta in the four Nikāyas that describes *paṭiccasamuppāda* as having twelve *aṅgas* and defines all twelve *paṭiccasamuppādaṅgas*.
- (2) The “Suttantabhājanīya” section of the “Paccayākāravibhaṅga” chapter in the *Vibhaṅga* follows almost the same definitions of the *paṭiccasamuppādaṅgas* as are found in the “Vibhaṅgasutta”, but changes the definitions of *saṅkhārā*, *nāma*, and *bhava*.

“Vibhaṅgasutta” → *Vibhaṅga*

(a) *saṅkhārā* : *kāya*-, *vacī*-, *mano-saṅkhārā* → *puñña*-, *apuñña*-, *āneñja*-, *kāya*-, *vacī*-, *mano*-(*abhi*)*saṅkhārā*

(b) *nāma* : *vedanā*-, *saññā*-, *cetanā*-, *phassa*-, *manasikāra* → *saññā*-, *saṅkhārā*-, *viññāna*-*kkhandha*

(As a result of this change, *viññāna* and *nāmarūpa* came to mean *pañcakkhandha*)

(c) *bhava* : *kāma*-, *rūpa*-, *arūpa*-*bhava*. → *kamma*-, *uppatti*-*bhava*

These changes made both “*saṅkhārā* ⇒ *viññāna* • *nāmarūpa*” and “*bhava* ⇒ *jāti*” common causations as follows.

(a) *saṅkhārā* ⇒ *viññāna* → *nāmarūpa* = *puñña*-, *apuñña*-, *āneñja*-*abhisāṅkhārā* ⇒ *khandhā*
kāya-, *vacī*-, *mano-saṅkhārā*

(b) *bhava* ⇒ *jāti* = *kamma*-*bhava* (including *puñña*-, *apuñña*-, *āneñja*-*abhisāṅkhārā*) ⇒ *khandhā*
uppatti-*bhava*

※ *jāti* is defined as “*khandhānam pātubhāvo*” (the appearance of *khandhā*) in the *Vibhaṅga*.

But in this text the standpoints of “*kāya*-, *vacī*-, *mano-saṅkhārā*” and “*uppatti*-*bhava*” are not yet clear.

- (3) The *Visuddhimagga* basically follows the same definition of the *paṭiccasamuppādaṅgas* as found in the *Vibhaṅga* rather than those of the “Vibhaṅgasutta”. Moreover, the *Visuddhimagga* interpretes the six *saṅkhāras* as three *saṅkhāras*, and restricts *bhava* as being the cause of *jāti* to only *kammabhava*.

(a) *saṅkhārā* ⇒ *viññāna* → *nāmarūpa* = *puñña*-, *apuñña*-, *āneñja*-*abhisāṅkhārā* ⇒ *khandhā*

(b) *bhava* ⇒ *jāti* = *kamma*-*bhava* (including *puñña*-, *apuñña*-, *āneñja*-*abhisāṅkhārā*) ⇒ *khandhā*

Therefore, it is clear those the *Visuddhimagga* interpretes both “*saṅkhārā* ⇒ *viññāna* → *nāmarūpa*” and “*bhava* ⇒ *jāti*” as “*kamma* (action) ⇒ rebirth”. With these interpretations, *Paṭiccasamuppāda* theory came to explain the causation of the past, present, and future.

- (4) The commentary on the Vinaya (*Samantapāsādikā*) and the commentaries on the four Nikāyas (*Sumaṅgalavīṭṭasīni*, *Papañcasūdanī*, *Sāratthappakāsinī*, *Manorathapūraṇī*) do not explain *paṭiccasamuppāda* in detail and advise readers to study it by reading the *Visuddhimagga*. Thus, the *Visuddhimagga* represents the final stage in the interpretation of *paṭiccasamuppāda* theory.